



巻 頭 言

光学研究の血液型

石 黒 浩 三*

光学の研究に限らず一般に研究というのは何をすることなのだろうかを考えようとすると案外にややこしい。大分類としては常に転進をつづける研究と一筋道に黙々と汗を流す研究とに分けられるかもしれない。…このように書きだすと、「お前の言いたいことはもうわかった。この後は恥をかく前に何も言わないで『終り』とだけ書いておしまいにすればよろしい」と言われる心配がある。しかし、せっかく誌面をいただいたのだからもう少しおしゃべりをさせてほしい。

研究の転進といってもいろいろなスケールがある。理科と文科，自然科学と人文・社会科学，理学と工学，物理と数学・化学・地学・生物，素粒子・原子核と物性，理論と実験，マクロとミクロ，光学と情報工学等が頭に浮かんでくる。これらのなかで最初のほうの数項目の場合にはこれを転進といってもどこからも文句は出ないであろうが，後のほうの項目になるとこの程度の変化を転進と騒ぎたてること自体，お前の頭の固い証拠だというようなお小言を食う危険性がしだいに増してくるであろう。

もう少し具体的なイメージがつかみやすいように光学の世界に焦点をしぼってみよう。もちろんここにもさまざまな研究の型がある。その時々で大きな流れとして関心を集める話題が変わっていくのは光学が活性を失っていない証拠として歓迎すべきであろうが，常に華麗にその先頭集団の中にあって活躍をされている研究者—B型と名づけよう—もあれば，また時流からはずれているがいわば伝統的な主題を追って地味ではあるが，あいつが言うのだから間違いないと言われるくらい信頼度の高い仕事をコツコツと続けておられる研究者—O型と名づけよう—もある。と考えているうちに，研究の型を俗説にいわれている血液型と人の性格の関係をモデルとしてシミュレートしてみたくなった。そのためにはA型，AB型の研究はどんなものかも考える必要がある。何となく繊細な理論研究はA型，アッと驚くような独創的な実験とキラメク理論の組合せはAB型であろうか。もちろん研究はどの型でなければいけないというような解の唯一性はないであろう。それぞれの方の性分また置かれた環境に応じて選択されるべきものであろう。しかしどのような型の研究に対しても有意義な基礎的素養というものには何かあるはずだというのが，連載講義の一部のお手伝いをさせていただいている間筆者を支えた楽観的な思いであった。